

## 福岡学生演劇祭 各団体へのコメント

長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院）

2020年度以来、4年ぶり2回目の審査員をお引き受けしました。前回はコロナ禍で明日をもわからない状況で、それでも演劇を対面でやるという切実さにあふれた作品が印象的でした。その時期から遠く離れ、演劇というものの社会性やその役割の変化に驚いた演劇祭でした。

結果としては、産業医科大学演劇部「宵闇アウトサイド」が圧倒的でした。脚本を拝見した限りでは、「ゾンビものかあ」と思い、演出として非常に短絡的な表象になってしまうではないだろうかと危惧されたのですが、実際に作品を見てみると、思わぬ「読みの多様性」を感じました。舞台上に絶妙に配置された扉の「向こう側」と「こちら側」。その構造が巧みに描かれていることで、観客はさまざまなメタファーとしてその境界線のことを感じ取ることができます。実際に、配役それぞれが異なるマイノリティ性や被害・加害の経験があり、劇中でそれらについてカミングアウトされるわけですが、立場によってカミングアウトの方法も態度も異なるという見せ方もまた、実社会で起こっているマイノリティ性をめぐるコミュニケーションをよく描いていた。ゾンビの手が取れるシーンをどう見せるか、など、演出の細かな点で気になるところはありました。せっかく再演の機会があるのでぜひブラッシュアップしてほしいと思います。

演劇の現場は非日常を演出しますが、そこが決して安住の地ではないこともあります。もしくは、演劇の現場では元気に振る舞っているのは、その場所以外に居場所がないからかもしれません。そうやって、演劇を志す多くの人たちがその場からいなくなっていましたことを思い出します。「ちゃんと生きるんでしょう」というセリフが、幾重にも意味が重なって捉えられた、秀作でした。

しいて言えば、私が次に推したいと思ったのは、西南学院大学演劇部「ふんわりパジャマズ」「演劇動物」でした。「演劇」というものが何であるかを問うものであったからです。また、見世物小屋というメタファーを用いながら、客席と舞台との関係性やその境界線にアプローチした演出を行っていたのはこの団体だけでした。ただ、始まり方の時点ですでに終わり方が予測できてしまうような脚本にもったいなさを感じました。また、見世物小屋を分析的に捉えると元来、観客の側の残酷な視点を問いかけるところに行き着くと思うのですが、そこまで演出・演技がはたらきかけられていないのも残念でした。また、動物として捉えられている人の個室は、もっとメタファーとして、戦時中の刑務所だけではない意味（たとえば私たちは「隔離」という言葉を2020年以降まったく異なる意味で頻繁に使用してきました）で捉えられる演出にもできたのではないかと感じます。

佐賀大学演劇サークルdrama!!は、主人公として描かれる「ペー」の存在感がかなり印象

的に映る作品で、配役の妙が光っていました。既存の脚本に挑んだわけですが、脚本を裏切る、深読みする演出になつてないのが残念でした。脚本を忠実に再現しているだけでなく、演出によってその意図をさらに深読みしたり、ときに裏切るような演出にもぜひ試みていただきたかったです。

九州大学大橋キャンパス演劇部 惑星未虎は、「〇〇男子」というような若者に対するステigmaとも言える名付けを扱っていて、テーマには現代性があるのですが、「8番出口」「Be Real」などの現代的な事象の扱い方も含め、一つひとつのテーマや発言への掘り下げが十分になされてない印象がありました。最終的に「マニュアル男子」になることを諦めた主人公のその先にも人生は続くことを考えると、その先が見えるような演出にはできなかつただろうかと感じました。

西短 MP 学科椿組は、非常にテレビ的な表現が目立ちました。演劇の身体表現としての強みと、テレビや映像の強みの違いをよく検討した演出を行うことが期待されます。また、ハッピーエンドにすることを優先したことで、一人ひとりの生き方が十分に描かれず演じられていない印象を受けました。定時制高校ならではの生徒一人ひとりの悩みはもうすこし複雑なのではないかと思われるのですが、そのリアリティに対する掘り下げが十分になされていないように感じました。

全体を振り返って残念なのは、今回は大学や専門学校などの単位でしか出演がなかったことです。ただしこれは一人ひとりに責任があるというよりは社会的変化の現れと考えるのが自然かなと思います。前回の演劇祭を拝見したかぎりでは、大学の枠を超えてインディペンデントなつながりを得る中で、作品づくりに切磋琢磨するコミュニティがありました。今回の応募団体のラインナップは、コロナ禍でそうしたコミュニティが断絶してしまったことを意味しているのかもしれません。また、それゆえなのか、作品ひとつひとつの目指すところが社会に開かれているというよりはむしろ内側に向いており、今の若者世代にしか伝わりづらい表現になつてたり、テレビやドラマでよく見られる表現を模倣するような表現が目立ちました。幸いにも演劇祭の実行委員会自体はいろいろな地域、いろいろな学校から集まつたメンバーで構成されているようなので、今後ポストコロナとしてのますますの復興を願いたいと思います。